

全ての生徒が前向きに取り組める体育の授業づくり

－焦点化、多感覚化、共有化の視点を通して－

富谷市立富谷第二中学校 高橋 達也

1 主題設定の理由

中学校学習指導要領では、「障害のある生徒などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。」とある。また、宮城県では、「令和5年度学校教育の方針と理念」において、インクルーシブ教育システムの構築をしていくためには、教員の特別支援教育に関する専門性を身に付けて高めていくことが必要だと述べている。

通常の学級に在籍する児童生徒の8.8%に、学習面や行動面で困難を示す発達障害の可能性があり、特別な教育的支援を必要とすることが、文部科学省から2022年12月13日に発表された。これまでも、発達障害のある生徒に不器用さが見られることは認識されてきた。また、動きのぎこちなさなど、発達性協調運動障害との関係も指摘されてきた。

本学級には支援を要する生徒が複数名在籍している。運動に対して興味・関心を持っているが、動き方がぎこちなく、運動を苦手としている生徒たちである。運動やスポーツに対して意欲が低下することは、体力の低下につながる。将来の健康を守っていくためにも、全ての生徒が運動やスポーツに親しむことは大切である。毎時間の授業において、運動量を確保しながら学習の質を下げず、全ての生徒が「やってみよう」という授業を展開するためには、特別支援教育の視点で指導方法を工夫していく必要がある。それが障害の有無に関わらず、全ての生徒の学びにつながっていくと考える。

これまで通常の学級に在籍する生徒と体育の授業を行ってきて、教師が技能を教えるだけでは、全ての生徒に運動やスポーツの楽しさや喜びを味わわせることが難しいと感じていた。苦手意識を持つ生徒の意欲を喚起するためには、授業において学習環境を整え、周りの生徒と生徒をつなぐ学級経営の視点も必要になってくる。そこで、授業のユニバーサルデザイン化の視点で授業づくりを行い、体育に苦手意識を持つ生徒も含め、全員が前向きな気持ちで取り組める授業づくりを行っていきたいと考えた。

これまで行ってきた体育の授業の主な反省点は、次の三つである。

- ①複数の教材・教具を使って場の設定をしたり、学習カードやグループカードをたくさん書き込ませたりする傾向が強かった。
- ②身に付けさせたい内容が複雑だったり、活動が広

がり過ぎていたり、ねらいが分かりにくいことが多かった。

③授業実践を通して「できた、できるようになった、こつがつかめた」と自己評価している生徒がいる一方で、一部の生徒には、「分からない、できない」と苦手意識を持たせていた。

苦手意識のある生徒も含めて、全員が意欲的に取り組める授業づくりが大きな課題である。「体育が得意な生徒」「何となくできる生徒」「体育に苦手意識を持つ生徒」「動きがぎこちない生徒」等、全員が前向きな気持ちで取り組める授業づくりが必要ではないかと考え、本研究主題を設定した。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の内容

主題を「全ての生徒が前向きに取り組める体育の授業づくり」とする。「前向きに」とは、全員に、「やってみよう」「できそうな気がする」という意欲を持たせることと捉える。「できる生徒」「できない生徒」も前向きに取り組むことができる体育の授業づくりとして、授業のユニバーサルデザイン化を行う。その中で、前向きに意欲的に取り組む姿を授業での観察と学習カードによる振り返りで評価していく。

授業のユニバーサルデザイン化とは、運動能力や発達障害の有無に関わらず、全ての生徒が楽しく「分かった・できた」と思えるように工夫・配慮された通常の学級における授業のデザインである。授業のユニバーサルデザイン研究は、特別支援教育の考え方や手法に学びながら通常の学級で、できる生徒もできない生徒も全員が前向きに取り組める授業を目指す、特別支援教育の研究となる。

(2) 授業のユニバーサルデザイン化の視点

授業実践Ⅰでは、「球技」ベースボール型ソフトボール、授業実践Ⅱでは、「器械運動」マット運動を行った。

授業のデザインに「焦点化」「多感覚化」「共有化」の三つの視点を取り入れた。

焦点化の視点

- ・学習内容をシンプルにし、活動内容を分かりやすくする。
- ・いつでも授業の見通しを確認できる場を設定する。
- ・スモールステップで技能が習得できるように、運動の仕方や内容を組み立て、その意義やポイントを声掛けしていく。
- ・導入において補強運動、基本練習をルーティン化

することにより、学習に見通しを持たせ、「できそう」「やれそう」といった安心感を持たせる。

- ・教師の指示は、一つの行動に一つの指示とする。

多感覚化の視点

- ・基礎感覚や視覚、聴覚、触覚を活用させた運動を行い、動き方のコツを促して「できそう」という運動感覚を持たせる。
- ・基礎感覚づくりにゲーム性を取り入れ、飽きないように繰り返し活動させる。
- ・言葉やリズムでコツやポイントをつかみ、技能習得を目指す。
- ・視覚的に技能のコツやポイントの理解を促すためにICT機器を活用する。

共有化の視点

- ・ペアやグループで動き方や技のイメージを伝え合う場面を設定し、コツやポイントを共有する。
- ・運動を安全にできる環境づくりを行い、話を聞く場所と活動する場所を分ける。場所の構造化を図り、活動に迷う生徒をなくすようにする。
- ・ICT機器の動画等を活用し、伝え方に苦手意識がある生徒も安心して、話合いや学び合いに参加しやすくする。

3 授業実践Ⅰについて

「球技」ベースボール型ソフトボール

(1) 授業について

導入では、毎時間行う補強運動として、投げる、捕る、打つ動きを取り入れた。動き方を理解させることを目標に行うため、ボールを持たないで行わせた。その後、動き方を理解できた状態でウレタンボールを使ってキャッチボールを行った。

ソフトボールの特性やルールを理解させる手立てとして、三角ベースの手打ち野球を行った。チーム編成は、人間関係や班のバランスを考え、学級の生活班(男3名、女3名)とした。また、屋外ではなく体育館を活動場所にした。ボールが風の影響を受けないこと、床が平らなため、イレギュラーなバウンドをなくすことで、ボールの状況を予測しやすい環境にした。

(2) 指導の成果と課題

①成果

ベースボール型を学ぶ上で三角ベースを学習計画の初期に取り上げたことで、基本的なルールの理解が進んだ。特に、ベースが1塁、2塁なので守備の動きがシンプルになり、アウトを取りやすくなった。三角ベースのピッチャーの投球は、ワンバウンドさせて打ちやすくし、バッターの打球は守りやすくなるため、内野でワンバウンドさせる条件にした。すると、運動に苦手意識のある生徒に「できそう」という意欲を持たせることができた。さらに、運動が得意な生徒には、長打を打つための力加減やバウンドの角度に難しさを感じさせ、挑戦する気持ちを持

たせることができた。学習カードの「積極的に授業に取り組めたか」では、生徒の85%がA「取り組めた、楽しかった」と自己評価していた。

視覚的効果を上げるためにブラックボードを使用し、掲示物を白黒反転させた。生徒がいつでも学習の見通しを持ちやすくなった(図1)。

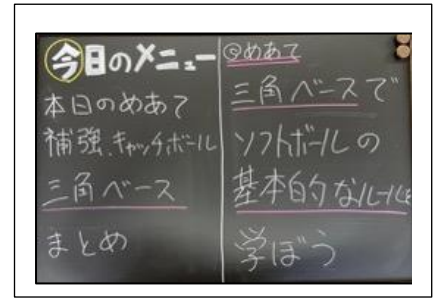


図1 ブラックボード

キャッチボールでは、投げる動作や捕る動作を補強運動で体験したことにより、「できそう」と自信を持って取り組む姿が見られた。投げる(トン、トン、パチン)、捕る(パッくん)の動き方を言葉やリズムで示したことで、投げる動作を口ずさみながら、違和感なく行える生徒が多く見られた。「パッくん」などの擬態語で、動きのイメージを生徒と一緒に言語化した。言葉やリズム感覚を示したことで、動きがぎこちない生徒に、動き方をイメージさせやすくなった。示範を見てすぐに理解できる中上位層の生徒には、いい投球には捕る側が「ナイスボール」などと声掛けしたことで、相手の胸元を狙って捕りやすい速さを考えて投げることができた。教具は、使用するボールをウレタンボールにしたことで、ボールに対する恐怖心が軽減し、投げる、捕る楽しさをより感じていた。

三角ベースでは、空気圧を高めた軟式テニスボールを使用した。安心感が増し、「これならできそう」と意欲的に取り組んでいた。

学習カードの自己評価で、チームの良さや改善点を見付け、協力できた生徒は88%であった。要因として、グループを学級の生活班にしたことが挙げられる。伝え方や接し方を日頃の学習活動で学んでいることや学級での良好な人間関係があること、考えたことを伝え合える関係性があったことが反映されていた。また、仲間に対するプラスの声掛けを促したことで、人間関係に安心感が生まれ、仲間と協力できた生徒が多かった。そして、意欲の高まりにつながっていた(図2)。

積極的に授業に取り組めたか。	A・B・C	楽しめた!
ルールを理解し、仲間と協力できたか。	A・B・C	少しわからない点もあったが、協力してすることができた。
仲間にプラスの声掛けができたか。	A・B・C	前日よりアットホームな気持ちでできた。
積極的に授業に取り組めたか。	A・B・C	楽しめた!
ルールを理解し、仲間と協力できたか。	A・B・C	少しわからない点もあったが、協力してすることができた。
仲間にプラスの声掛けができたか。	A・B・C	前日よりアットホームな気持ちでできた。

図2 学習カードによる自己評価

②課題

学習カードの振り返りでは、「三角ベースのルールや動き方があまり理解できなかった」という生徒が4名いた。打ち方を実際にやって見せたり、ルールを言葉で補足したりして、もっと詳しく説明する必要がある。また、友達に対して、プラスの声掛けができなかった生徒が5名いた。褒める基準が分からず、声を掛けられないのが理由だった。「プラスの声掛け」として掲示物に示していたが、教師が具体的に褒める声掛けをしたり、生徒の良い声掛けを授業の中で評価して、全体に広げていくことも必要であった。

授業の流れを示したブラックボードを、パイプ椅子に立て掛けて提示したが、見やすい高さや位置を考える必要があった。

ボールを正面でキャッチするなど基本的な動き方が身に付いていない生徒がいた。投球の技能を考えると、捕球時の動き方にも言葉やリズムで理解を促す必要があった。

4 授業実践Ⅱについて

「器械運動」マット運動

(1) 授業について

導入時の流れをルーティン化し、授業の見通しを持ちやすくした。補強運動や基本練習では、マット運動の逆さ感覚の経験を豊富にし、基礎感覚を養う支援を行った。また、練習の合間に互いの頑張りを認め合う機会として生徒間でハイタッチを行い、周囲に拍手を促した。

技能の習得に向けて技を細分化し、スモールステップで「できそう」「おもしろそう」という思いを実感させた。その流れで恐怖感を軽減できるよう配慮した。

生徒間補助では、感覚過敏の生徒に対する補助の仕方として、手のひら全体で補助したり、腕全体で包み込むように補助させたりすることで、安定した補助ができるよう徹底させた。さらに、触られることに苦手意識がある生徒の補助具として、毛布やタオルを準備した。

器械運動の特性を考え、ICT機器で演技の示範を自作動画にした。また、話し合い活動では、タブレット端末で撮影した動画を活用させた。

滑らかな動きを意識させる手立てとして、演技を擬態語で表現したり、電子ホイッスルでリズム化したりした。

(2) 指導の成果と課題

①成果

技能のポイントの理解を促すため、ICT機器を活用した。事前に撮影して編集した示範と実際に行う教師の示範で解説したことで、後から何度でも確認させることができた。様々な動画アプリを視聴している生徒たちには、動画の示範でポイントを押さ

えさせ、実際に行う示範でコツをつかませることができた。生徒に注目させたいポイントを強調するのに効果的だった(図3)。



図3 動画編集による示範

毎時間の活動のルーティン化で見通しを持ちやすくなり、学級全体の動きがスムーズになった。生徒たちは、次の活動が分かり安心感を持って授業に取り組むことができていた。

補強運動と基本練習では、「体をしめる」「バランスをとる」「回る」「ジャンプする」の運動の組み合わせをルーティン化したことで、習得させたい技能に対して、「できそう」「やってみたい」と心理的な安心感を持たせることができた。電子ホイッスルを使用することで、音に敏感な生徒が安心して活動することができた。また、音に対する抵抗が減ったので、電子ホイッスルを鳴らしてリズムを取らせながら声掛けを行うことができた。

ブラックボードを見やすい位置に提示することで、生徒はすぐにめあてや学習内容を確認できるようになった。授業実践Ⅰより、文字を大きくしたことで、遠くの位置からも確認しやすくなった。掲示物として、安全に学習するための「マット運動の約束」と互いを称賛する「プラスの声掛け」の仕方を白黒反転で掲示すると、生徒が迷った時に何度も確認する姿が見られた(図4)。



図4 ブラックボードと白黒反転した掲示物

演技構成のポイントやコツを発見させる手立てとして、ICT機器の録画機能を活用した。話し合い活動では、言葉や文章で説明することが苦手な生徒が自分の考えを伝えやすくする手段となった。指差しするなど仲間同士で良くなった点を見付けやすくなった。見合ったり、教え合ったりする活動を通して、発表を苦手とする生徒が安心して演技できる雰囲気醸成することができ、学習に対する意欲を高めることができた(図5)。



図5 タブレットを使用した話し合い活動

練習の合間にハイタッチをさせてきた。授業の最初の頃は、抵抗感を持つ生徒もいたが、ルーティン化したことで、自然に行うことができるようになった。活動の雰囲気が良好になり、人間関係の安心感からグループ内の活動意欲が高まった。安心して生徒間補助を任せ、不安を抱かずに話し合い活動ができる関係につながった(図6)。



図6 ハイタッチの場面

②課題

示範の動画を全生徒に送ったことで、動画を見過ぎてしまい、練習や活動が少なくなってしまうことがあった。場面によっては、テレビ画面に流すだけにするなど、使い分ける必要があった。また、動画を確認する時間と練習や活動の時間が重複していたため、タブレット端末の使用時間が長くなり、練習や活動がおろそかになる生徒がいた。ICT機器の使用にあたっては、教師が使用させる目的や学習の仕方、使用時間、タイミングを生徒に指導する必要があった。タブレット端末の使用時間が長くなってしまわないように、使用のタイミングと終了のタイミングを設定することも必要だった。

個人の課題練習をする時間は、意欲的な生徒と消極的な生徒で活動量に差が出てしまった。マットを使うことをためらってしまい、活動に消極的な生徒が複数名いた。学級全体で、目標を達成しようとする雰囲気を作る必要があった。

5 おわりに

(1) 授業実践Ⅰ、Ⅱを通して

特別支援教育の視点で授業づくりを考えてきたことで、多くの生徒に「できそう」「やってみよう」と意欲的に活動に取り組ませることができた。そして、教材・教具を工夫することで、生徒の運動経験の差や体力差を縮めた状態で授業を開始することができた。

多感覚化の視点から体育に苦手意識がある生徒の基礎感覚が養われ、技能のこつをつかむことができるようになってきた。少し難しい技能や内容にも前向きに取り組む姿勢が多く見られるようになった。

教師からの励ましや褒める声掛けを多くしてきたことで、生徒同士でも頑張りを褒めたり個性を認め合ったりする基となり、良好な雰囲気を醸成できた。

共有化の視点を通して、生徒がみんなで協力して授業の目標を達成しようと互いを励ましたり、できたことを自分のことのように喜び合う姿が見られた。肯定的な学級の雰囲気づくりにもつながり、日頃の信頼関係や仲間づくりに波及していくと感じた。

特別支援教育の手法から指導の工夫を行うことは、支援が必要な生徒だけでなく、学級全員の学びにとって効果があることが分かった(図7)。



図7 協力して片付けしている様子

(2) 今後の課題について

令和4年度宮城県の体力運動能力の調査結果によると宮城県の生徒たちの体力は年々低下傾向にある。基礎感覚が身に付いていない生徒も多くいる。その現状から各領域で必要とする体力や基礎感覚を養うための運動の組み合わせを考え、三年間を見据えた体力づくりを行っていかねばならない。そのために、指導の改善を目指す、カリキュラムマネジメントの手法を学んでいきたい。

運動に対する苦手意識は、できないことへの恥ずかしさからくることが多い。仲間が励まし、共感できる雰囲気があると、改善に向かうこともある。学び合える雰囲気をより醸成できるように、学級経営に関する知識・技能をしっかりと身に付け、磨いていきたい。

今回の授業実践では、授業の焦点化が課題として残った。学習内容や試合のルールを理解できなかった生徒がいた。一時間の活動内容が多かったり、ルールが複数あったりした。生徒がより安心感や自信を持って取り組めるシンプルな授業づくりを目指していきたい。また、特別支援教育の対象となる生徒に対しても、言葉掛けや掲示物の提示の仕方を工夫するなど、支援の在り方を日々の実践を通して見直していきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省：「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編」2017
- 2) 清水由「体育授業のユニバーサルデザイン」2019
- 3) 清水由、石坂晋之介・山下大晃・結城光紀、一般社団法人日本授業UD学会「テキストブック授業のユニバーサルデザイン体育」2022
- 4) 一般社団法人日本授業UD学会「授業UD研究VOL.14」
- 5) 阿部利彦「通常学級のユニバーサルデザインプランZero」2014
- 6) 三好真史「体育が苦手な教師でも必ずうまくいくマット・鉄棒・跳び箱指導の教科書」2018
- 7) 学校体育研究同志会「一たのしい体育シリーズ④ーマット運動」1988

【写真・感想の許諾について】

授業実践の中で生徒の様子と学習感想の一部である。図2は授業実践の中で生徒が記入した感想の一部である。図6、7は活動の様子である。生徒が特定できないようにすることとし、生徒の保護者及び所属長から使用許諾を得た。